

令和俳句論考

廣瀬 茂雄

植木屋が一日眺めし大暑かな

中田 水光

海鳴りのやむとき香る野水仙

(第六句集「猛暑」より)

句集名の「猛暑」は作者の「猛暑また投げ込んでみる登り窯」からとったもの。このところの異常な暑さが背景にあるうが、季節と向き合う俳人にとって、令和の暑さは新たな句材でもある。

一句目、外で仕事をする植木屋も、お手上げの暑さだというのである。大暑の日の想像以上の暑さで、さて植木屋は何をしているか。「商売上がったり」というほやき顔が見えてくる。体に身に着ける屋外用簡易扇風機の登場など初めて見る景も出てきたが、暑さによる植木屋の「休業日」も、そのひとつだろうか。

二句目、風を伴った海鳴りだろうか、長く耳を傾けている作者がいる。その音が途切れた時に、あたりに自生する水仙の香りを改めて意識したのである。聴覚から嗅覚への転換、作者の研ぎ澄まされた感性を思う。

氏は「雅楽谷」主宰

槽を漕げば楽の生まるる良夜かな

河瀬 俊彦

煤逃の翁ばかりの古本屋

(第二句集「槽の音」より)

作者はあとがきで「ファンタジーにも憧れますが、リアリティ

も大切にしたい」と述べている。自選句の「夜業終へ詩人に戻る終電車」も、そんな氏の生活の一断面を詠んだ句なのだろう。

一句目、句集名になった句。京都大覚寺の大沢池の観月会の様子と少年時代に伝馬船の槽を漕いだ思い出が緋い交ぜになって出来たと、あとがきにある。大覚寺は平安初期の嵯峨天皇の離宮だったところに建つ。仲秋の名月を空と池面の双方で堪能しながら雅楽の音色に思いを馳せるのは、ファンタジーの世界そのものだ。

二句目、実にリアリティのある景で可笑しみもある。しかし、煤逃が許されるのは、今では年配の方だけであろう。「古本屋」の措辞は古い世代を暗示してもいようか。最近の若い男性は、年末の掃除や片付けに協力的だ。この季語も消えゆく運命だろうか。

氏は「爽樹」名譽顧問

灌仏のみ寺に虚子を祀りけり

中村 雅樹

築守に榎の蔭のありにけり

(現代俳句文庫Ⅱ「中村雅樹句集」より)

本句集は作者が上梓した三つの句集から、自身が精選した句を収める。あとがきで宇佐美魚目、大峯あきら、両先師の言葉を引きながら、自身の目指す俳句の道が遠いことに呆然とする旨が述べられている。御歳七十七歳、高潔な求道者の姿を思う。

一句目、灌仏とは四月八日の釈迦の生誕を祝う法会で仏生会、花祭とも呼ばれる。またこの日は高浜虚子の忌日でもある。比叡山延暦寺の横川には、虚子の分骨が納められた「虚子の塔」があるが、掲句は四月八日の延暦寺を素材にして詠んだものだろう。「釈迦」と「虚子」が見事に一句に収まった実に痛快な句だ。

二句目、一見無造作にも見える句だが、奥が深い。榎の蔭は築

守が暑さを避けて体を休める場所だろう。それを作者は見つけたのだが、そこだけを詠むことで、暑さの中で黙々と働く築守の姿まで彷彿させてくれる句になった。師の魚目が残した「眼前の見えるものを通して見えぬものを詠う」という言葉を思う。

氏は「晨」代表

親族でふ貌の並びし月夜かな
春キャベツ水軋ませて洗ひけり

岩津 厚子

(第三句集『全方位』より)

あとがきで作者は、「様々な束縛から離れはじめた今、このころの動くままに俳句を捉えたい」と述べ、四十年の句歴を振り返りつつ、俳句への感謝の思いを綴っている。

一句目、これは慶事の光景か、弔事の光景か。いずれにせよ作者は親族が集まっている場に遭遇したのである。血の繋がりがあれば容貌が似るのは当然であるが、作者は「血」というものの不思議さを改めて感じたのであろう。親族が並んだ光景を少し冷めた眼で捉えたと、こんな俳味も感じられる句となるのだ。

二句目、キャベツの玉を洗う時の光景だ。実際は手とキャベツとの摩擦音だろうが、それを水が「軋む」と表現したところがユニークだ。これも、このころの動くままに詠んだ句に違いない。

氏は「晨」同人

古池にゆきどころなき花筏
シベリアのしづく滴る白鳥来

穂矢まりえ

(第一句集『妖精に注意』より)

あとがきによれば作者はフランス文学を学んでいた学生時代に発症した難病を機に俳句と出会い、人生に新たな光が差し込んだ

と言う。「俳句に救われた」は年配者だけの言ではないのだ。

一句目、花筏と言えば川を流れる姿を思うが、流れのない池でも桜の落花の連なりはよく見かける。それを筏と呼ぶのかはさておき、古池の花の塊には何かしら華やきがある。そこに自己投影した作者の鬱屈した気持ちも感じられる句。

二句目、ファンタジーを感じる句だ。シベリアからの長旅を終えた白鳥に彼の地の「しづく」は付いてはいまい。しかしこの上五中七の措辞からは時空を超えた、大らかな臨場感のようなものが伝わってくる。作者の詩魂を感じさせる掲句が句集の掉尾を飾る。

氏は「銀化」同人

夏薊島の十字路ここのみと

星野 佐紀

枯葦や搔掘に立つ鷺一羽

(第一句集『不東』より)

あとがきによれば、大変旅好きの方の方ようである。俳句との縁を語った後、「各地で四季折々の景に出合い、俳句を通して旅の時間がより豊かなものになった」と述べている。

一句目、大きな島でない限り、島の集落は海沿いにあり、道はそれらを海に沿って繋ぐ。平地では見慣れた十字路がこの島には一カ所、しかもそこには夏薊が咲いている。山がちな小島にある十字路の発見は作者にとつては新鮮だったに違いない。

二句目、池の搔掘をしている最中、一羽の鷺が餌を狙って脇に立って構えているのである。おこほれに預かろうという鷺の「胆」。人間と鳥との共存を詠んだユーモアのある写生句だ。

氏は「都市」同人

(筆者住所 〒444-0842 愛知県岡崎市戸崎元町九一七)